

海 と 探 検

小 儀 政 幸

我々は何故に探検部に入ったのであろうか？そして私は何故に海にそれを求めたのであろうか？海の中には色々の興味深いものがある。しかもその海は洋々としており色とりどりの美しさがあり、我々の日常では得られない異常さと言うか、美しさと言うか、そのようなものが存在しておりそれが我々をひきつけるのである。

この海を媒体として探検を行なうという事は色々の理由があろう。しかしその本質は何か変った物を見たり、変った事をしたいという人間の素朴な感情ではなかろうか。人間には頭脳という現存する電子計算機の数百万倍もの精度と回路を持った“考える組織”がある。そしてその組織は常に考えており、人間の進化もその“考え”によってもたらされたと言って過言ではない。だからその“考え”によって最初に疑問が起こり、その疑問を探求し、その答を得られる事によって解答を信頼し、満足が得られるのである。

我々は生まれてこのかた疑問と探求を常に追い求めてきた。それらを何故追い求めるのであるかと言われるならば人間の欲求本能であろうと思う。人間の欲求本能はあらゆる方面に発揮され、色々のものを知りたい、あるいは変ったものを見たいという感情にもあらわれる。そしてこの感情が行動に現われれば探求となる。この探求に調査又は観察を伴うとすれば探検となり、海底にその探検を求めたならば海底探検となる。我々の欲求が全地表の約70%を占める広大な海の中に何が有るのだろうかという疑問に思い、探りはじめた時、探求が生じ調査、観察を行なうと探検になる。

しかし探検にはもう1つの重要な要素が有る。すなわち「未知の世界を探る」という事だ、ところが未知というのに対して2つの解釈が有り、自分自身が未知であれば良いというものと、社会的未知であらねばならないというものがある。これは個人的探検と社会的探検とに別かれる分岐点でもあるが、我が部を見ると今までは前者のようであり、現在除々にではあるが後者に移行してきて

いるようである。洞窟の最深記録や未知の海や未登の山あるいはボート活動などがそうである。

さてこのあたりで本題に帰ってみよう。海と探検についてであるが、海の中には未知の世界が（個人的、社会的ともに）無数といえるほどある。たとえば変哲もない洞窟でさえ10 mも深くなれば海の中に有るという事だけでほとんど探られてはいない。太陽のとどこかぬ世界に出てくる洞窟探検などもそうである。また無数の魚類やエビ、カニ類が群らっており、多種多様なサンゴの林などまるで現実の世界ではないような美しさをも持っている。それは水によって我々の生きる為の必要条件である酸素を得る事が出来なかったので人類は昔より泳いでいる間に海の中を見るより方法が無かったからである。だから海の中には人間の支配力はとどかず、全然異った動物達によって支配され、人間はそのおこぼれを得ていたにすぎず全く未知の分野として残されていたのであった。

なるほど人間は太古より海の中をのぞきたいという欲望にかられ、かの有名なアレキサンダー大王は2300年も昔にガラス製のタル（コリムファと名づけるダイビングベル）を船より綱で下ろしてもらって長時間のぞいていたそうだし、レオナルド・ダ・ヴィンチは西暦1500年頃に今のアクアラングに似た器具のスケッチを書き残している。また日本の事については「魏志倭人伝」に克明に潜水して魚貝類を採っている人々がいる事を記してある。だがこれらはほんの一点であり大部分は人々の目にはふれず、ましてその有様を他人に伝える事はほとんど無かったに等しいであろう。

しかし近年潜水器の発達と漁業並に水中測定器の発達はめざましく19世紀の後半にはチャレンジャー号の5年にわたる海洋調査により50冊もの報告書を出す程になり、その後続々とこの種の海洋探検が盛んになったが、その決定的な発達は1943年フランスのジャック・クストー大佐等が完成したアクアラングによってなされるに至った。これは手近で簡単・便利に運搬が出来るので一般の人々にも水中をのぞけるようになり、また水中記録映画や、何十日間も水中で生活し真実の海の姿を克明に知らせる事が出来るようになった。

この様にして太古より謎のように思われていた水中の色々な出来事もその全貌をほとんど現わすようになりつつある。だが全貌を現わすとともに海の中は

その本来の姿から人間によって荒らされまた変えられて来ている。

たとえば、大阪湾の汚れにしても、またトロール船による雑魚までの乱獲や漁師による魚の乱獲にしてもそうである。だから我々は今この様な時点に立ち変化していき、尚且つ人間にとって未知の世界である海に探検の場を見出したのであり、我々の知る範囲で海を記録して行こうというもののなのです。

新しい包装は

高岡のカラーシートで!!

高岡段ボール工業 K.K.

住所：大阪市生野区巽西足代町 463

電話：(751) 5963~5